



所 功 著

天皇の「まつりごと」 象徴としての祭祀と公務



日本放送出版協会 2009

天皇は“日本で一番お忙しい終身公務員”だといえよう。では、なぜ忙しいのか、具体的に何をしておられるのか、可能な限り判り易く解き明かそうとしたのが、ささやかな本書である。

私は昭和41年から皇室とゆかりの深い皇學館大學に勤め、伊勢の神宮へ参られる当時の天皇・皇后や若い皇族たちをしばしば奉迎した。また学生たちと皇居の勤勞奉仕に上がり、当時の皇太子・同妃から親しく御言葉を賜ったこともある。

ついで文部省に奉職中、外国の大使たちが信任状を奉呈するため、東京駅前から宮内庁の馬車で参内する姿を何度も見かけた。また、専門の宮廷儀式を研究する必要もあって、皇居内の書陵部へ行くと、当時の皇孫浩宮さま(学習院大学文学部で日本史ご専攻)が熱心に調べ事をしておられる様子を遠くから拝見したこともある。

さらに本学へ着任する前後から、年号=元号に関する論著を公表していたことなどが機縁となり、昭和64年1月7日の「平成」改元について多少の関わりをもった。また、そのころから皇室の儀式・行事などについてマスコミでも解説や意見を述べる機会が多くなり、今に及んでいる。

こうした四十数年来の体験を通して、私の皇室に対する認識が少しずつ広がり、天皇に関する資料も整理しきれないほど集まった。そこで、本書には盛り込みたいことが沢山あったが、新書(最大256頁)という制約上、本論を次のような構成とし、それ以外に細字で1~2頁のコラムを十数項目設けるに留めた。

- 序 現代の天皇は超ご多用
- I 年始と毎旬・毎朝の拝礼
- II 自然神などに祈る祭祀
- III 祖先神などに祈る祭祀
- IV 憲法の定める国事行為
- V 象徴としての公的行為

現行憲法のもとにある象徴天皇のお仕事は、一般に④国事行為=IV、⑤公的行為=V、⑥私的行為に分けられる。しかし、その中味は必ずしも正確に知

られていない。とくに、政教分離の建前から〇とされる宮中祭祀は、ほとんど報道もない。よって、本書では、それをI II IIIに分け、詳しく紹介することに努めた。

ちなみに、昨年12月15日、中国の習近平副主席が来日の機会に「公賓」として天皇陛下に面会した。しかし実をいえば、陛下は既に平成15年に癌の手術をされても超ご多忙なため、日程調整の必要上、少なくとも三ヶ月前までに面会申請するよう、宮内庁から外務省・在外公館に通達していた。ところが、当時の政府は11月に入って強引な申し込みをしたので、宮内庁が一旦断った。すると、与党の幹部が「あれは国事行為なんだから、天皇が内閣の要請に従うのは当然だろ。お忙しいなら他の仕事を止めればいいんじゃないか」と嘯いている由を伝え聞いて驚いた。

これはトンデモナイ誤認で暴言に近い。天皇が国賓・公賓に面会されるのは、憲法に記す国事ではなく象徴として務められる公的行為である。しかも、あの日は夕方六時から夜半零時まで、皇祖天照大神を祀る賢所の前において、御神楽を奉納する宮中祭祀があり、両陛下も皇族方も拝礼をされ、御所で慎まれる重大な日だったのである。

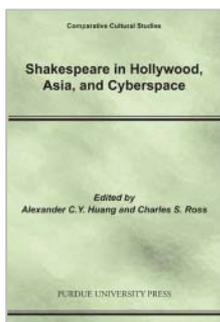
なお、昨年、両陛下御成婚50年の機会に、本書と前後して、『歴代天皇の実像』(モロロジー研究所)と共編著『皇室事典』(角川学芸出版)を公刊した。併せてご覧いただけたらと念じている。

(ところ いさお 法学部教員)



カット 射鹿 良太

(法学部 4年次生)



鈴木 雅恵 ほか著
Shakespeare in Hollywood, Asia, and Cyberspace
Alexander C.Y. Huang, Charles S. Ross 編
Purdue University Press 2009



元来、シェイクスピア上演研究は、シェイクスピア・テキストを忠実に再現する英国、特にロイヤル・シェイクスピア・カンパニーの上演を「正当なもの」としてきたが、今ではそうした権威には疑問が投げかけられ、新たなパラダイムが模索されている。ここ20年ほどの間には、ハリウッド映画を含む映像化されたシェイクスピア作品の分析が英国のシェイクスピア学会でも真剣にとりあげられるようになり、また一方で、東洋の伝統演劇の手法を使ったシェイクスピア上演にも急速に脚光が当てられるようになってきた。

筆者は、1996年以来、いくつかの国際学会で「日本」のシェイクスピア受容と上演について発表してきたのだが、今回、米国 Purdue 大学出版の比較文学シリーズの一環として刊行された本書に収められている「Shakespeare, Noh, Kyogen, and Okinawa Shibai」という論考も、2006年7月にオーストラリアのブリスベンで行われた国際シェイクスピア学会での発表原稿をもとにしている。

筆者は論考の前半では、「日本」における西歐文化の象徴としてのシェイクスピアの初期の移入と、「日本」経由でシェイクスピアを受容した沖縄という歴史的背景の中での、伝統と近代という問題を論じ、後半では現代における伝統演劇の革新とシェイクスピアとの関係について、能、狂言、沖縄芝居の例を挙げて論じた。この論考は本書の第二章に収められているのだが、同章には、中国、台湾、香港、マレーシア、インドネシア、カンボジア、韓国の研究者たちの論考もあり、併せて読むと、東アジア圏におけるシェイクスピアの受容と変容の概略を学ぶことが出来る。

第一章はハリウッド映画の分析が中心だが、本書の編集者でもある Purdue 大学の Charles S. Ross 氏が、黒澤明の『乱』からバス・ラーマンの『ロミオ+ジュリエット』に至るまで、数多くのシェイクスピア映画の中の「水と女性」のイメージを分析し、比較文化論としても、映画論としても、読み応えがある論（“Underwater Women in

Shakespeare on Film”）を展開している。

第三章はサイバースペースにおけるシェイクスピアの変容がテーマで、ウェブ上のシェイクスピア・ジャーナルの構築や、MMOGs やクエスト・ゲームにおけるシェイクスピア劇体験について論じられる。

全体として、映像を含むシェイクスピア劇の上演の現状と、未来への展望が論じられているのだが、最新の映像やゲームが紹介されている一方で、東西文化の融合や、アジアの古典芸能の復元とシェイクスピアとの関わりをも論じている点が、本書の特徴だろう。又、Ross 氏の論考だけではなく多くのアジアの研究者の論考にも、シェイクスピアをモチーフとした黒澤明監督の作品への言及があり、時代と国境を越えた彼の作品の影響の大きさに今更ながら驚かされる。筆者の論考の中では、宝生流の『新作能・マクベス』（作：泉紀子、シテ：辰巳満次郎）をとりあげているが、黒澤監督の『蜘蛛巣城』が、『マクベス』をモチーフに、能の手法を取り入れて撮られたのに対し、こちらは純粋な新作修羅能の形をとる。また、この能は今年10月に山梨県北杜市の身曾岐神社能楽殿にて、「黒澤明生誕100年祭 IN 北杜市」の行事の一環として改めて上演される。本書が、現在も続くこうした広義の意味でのシェイクスピア現象を紐解く手がかりとして読まれることを期待する。

(すずき まさえ 外国語学部教員)



カット 射鹿 良太

(法学部 4年次生)



吉野 秋二 著

日本古代社会編成の研究

塙書房 2010



私は、本年4月、文化学部准教授として赴任しました。本著は、赴任直前、2月に発刊された私のはじめての単著です。

本著に収録した学術論文は、概ね、日本古代史、奈良時代～平安時代中期(8世紀～10世紀)を対象としています。「社会編成」という言葉は耳慣れないかと思いますが、「国家や社会集団による人間の編成」を意味する語として使用しています。単純に言えば、日本の古代社会において、人々はどのような形で集団や組織を形成し生活していたのか、それを国家はどのように支配したのか、そうした問題に取り組んでいます。

本著は、序章 日本古代の社会編成につづき、第一部 身分制論・社会集団論(第一章 良賤制の構造と展開／第二章 補論日本古代奴婢研究の理論と方法／第三章 非人身分成立の歴史的前提／第三章 「人給所」木簡・墨書土器考／第四章 食器の管理と饗応／第五章 古代の「米」と「飯」／第六章 古代富貴譚考)、第二部 徭役制論(第一章 大化前代のエダチと国造／第二章 大宝令歳役・雇役制試論／第三章 大宝令賦役令歳役条再考／第四章 雑徭制の構造と展開／第四章補論 日唐比較財政史研究の理論と方法)の二部構成のもと、10本余の論考を収録しています。簡単に内容を紹介します。

第一部は、身分制と社会集団に関する研究成果を収めています。日本古代には賤、中世には非人と総称される被差別身分が存在しました。第一部では、被差別身分制の展開を中心に、古代の身分制の特色、中世への移行の過程を追っています。また、基礎的な社会集団である「イエ」について、内部にどのような組織が存在したのか、具体的に考察しています。古代史研究では、少ない材料から規則性・法則性を導き出すと共に、文字の書かれていないものも含め、さまざまな資料を有機的に活用する必要があります。第一部では、木簡・墨書土器、説話文学などを用いて、古代社会の実態をリアルに復原することを試んでいます。

一方、第二部には徭役制に関する論考を収録しました。徭役とは、成年男子に課せられた一般的強制労働を意味する語です。7世紀後期に律令国家が成立すると、租税として歳役・雑徭といった徭役が賦課されました。本著では、徭役制の成立と展開を、法制史的手法を用いて、古墳時代から平安時代中期まで考察しています。今年は平城遷都1300年ですが、「古代の都を造営する際、全国からどのような形で労働者を徴発したのか」といった問題にも取り組んでいます。

私にとって、本著は、本学赴任までの半生の集大成としての意味をもちます。研究者向けの純然たる学術論文集なので難しいかと思いますが、特に私の授業を受講された皆さんには、一度手にとってもらえればと希望しています。

(よしの しゅうじ 文化学部教員)



カット 射鹿 良太

(法学部 4年次生)



山岸 博 ほか著
さまざまな栽培植物と農耕文化
(ユーラシア農耕史 第4巻)
木村 栄美 編



臨川書店 2009

私たち人類を含めて、地球上の全ての動物は、植物が光合成によって作り出すエネルギーに完全に頼って生きています。その中で人類は、1万年あまり前に、植物を栽培して収穫するという方法を発明しました。農耕の始まりです。それ以来、栽培植物という今まで地球上になかった植物の進化が始まりました。そして、ある地域で作られ出された栽培植物の新しい品種は、他の地域へと次第に広がって行きました。このような1万年以上にわたる栽培植物の進化の歴史について調べることは、これから先、人口急増と食糧難が予測される地球の健全な将来に向けて、どのような栽培植物を作って行けばよいのかについて指針を与えます。

この本は、「ユーラシア農耕史」という5冊シリーズの第4弾で、「さまざまな栽培植物と農耕文化」というタイトルを持ちます。ユーラシアの主要な作物といえば、コムギとイネですが、この2作物については、第1〜3巻で扱われています。第4巻ではメロン、マメ類、雑穀、チャ、根菜類を対象として、農耕システムと栽培される品種の多様性という視点から論じられています。私はその中で、「日本列島におけるカブとダイコンのなりたち」と題して、日本人とこれら2つの根菜との歴史的なかわりについて、今までの研究の成果を紹介しました。カブとダイコンと言われても、学生諸君にはピンと来ないかも知れません。ダイコンは、おでんには必須の一品ですし、コンパの時に出てくる「ダイコンサラダ」で、まだなじみがあると思いますが、カブの方は日頃の食事でも口にすることはほとんどないでしょう。

「京都には、千枚漬けにする聖護院カブや上賀茂持産のスグキナというカブがありますよ。」と、私がいくら言っても、「それって何のこと？」程度のことだと思います。でもこの2つの作物は非常に古くに日本に到来してから、準主食として利用されてきた重要な食糧源であり、また日本の各地に多彩な在来品種が生み出されてきました。

今から50年以上も前、日本の研究者が各地のカブの品種について特徴を調べました。すると、本州の

中部、ちょうど福井県・滋賀県・岐阜県のあたりを境にして、きっぱりとした特徴の違いが見つかりました。この違いはネギなどの他の色々な作物の違いだけでなく、言葉使い、食事の味の濃さなど文化の違いとも共通していました。これは西南日本と東北日本へ、異なる2つのルートでカブが伝来し、定着したことを物語っていると考えられています。私たちの研究室ではダイコンについて、日本各地の品種のDNAを調べました。その結果、ダイコンではカブのように西南対東北というはっきりした地域分けはありませんでしたが、南アジアからきた品種と北アジアから来た品種という違いが発見されました。想像をたくましくすると、日本列島にカブやダイコンを携えてきた人類の道には、大きく2つの流れがあるということになります。またカブと異なるダイコンの特徴として、アジア大陸から伝来したものだけでなく、日本列島で独自に野生ダイコンから栽培化された品種があることも見いだされました。

栽培植物のDNAを調べることは、それを育て利用している人間のDNAを調べることもつながります。食欲の秋。おでん界におけるダイコンの永遠のライバルが、地球のどこで生まれ、どのようにして日本に運ばれてきたか。そのような作物と人間の歴史にフッと思いをめぐらすことは、私たちの精神生活を多少なりとも豊かにするように思われます。

(やまぎし ひろし 総合生命科学部教員)



カット 射鹿 良太

(法学部 4年次生)